

【学年評価】

校訓	「自律・忍耐・向上」
メインテーマ	「挑め、ともに！」
学校教育目標	1 郷土に誇りと愛着を持ち、学び続けながらよりよい地域づくりに主体的に関わる人材を育成する。 2 健康で豊かな人間性を持ち、新たな価値創造に挑む人材を育成する。 3 多様性や個性を認め、他者を尊重しながら協働できる人材を育成する。
学校経営方針	小規模校のよさを生かし「生徒一人ひとりが輝く活気ある学校」を実現する。 *** 育成したい資質・能力 *** (学校教育目標の実現のために) 1 主体性 「自己理解・自己肯定感・学ぶ意欲・計画力・意思ある選択・創造的市民性」 2 挑戦心 「情報収集活用能力・課題設定力・共感性・思考力・創造力・行動力・やり抜く力・伝える力・振り返る力」 3 協働力 「受容力・対話力・共創力・持続可能性意識・グローバル意識」

達成度
A:達成できた
B:ほぼ達成できた
C:やや不十分である
D:不十分である

重点目標	重点目標の達成度	重点取組	学年	重点取組に対する具体的方策	具体的方策の達成度	年度末達成状況	評価の根拠:実現された生徒や学校の姿 等
1 個別最適な学びと協働的な学びの推進	A	① 国指定事業の充実と白い森未来探究学の深化により、持続可能性の高いカリキュラムを開発する。 ② ICTを活用し、個別最適な学び・協働的な学び、教科等横断的な学習を実践することにより、本校生に育みたい資質・能力を伸ばす。 ③ 地域や企業・大学等と連携したキャリア教育や体験的教育活動を推進し、キャリア意識を醸成する。 ④ 個々の進路希望の実現を目指し、面談等を通じて意欲的・計画的な学習態度を涵養する。 ⑤ 図書館等の活用により、高い教養と豊かな心の醸成を図る。	1年	○生徒が自己理解や他者理解を深め、内面の言語化及び対話による深化を図れるような学習の場を計画的に設定する。 ○面談を適宜実施して生徒理解を深めるとともに、生徒の「主体性」「挑戦心」「協働力」の成長に対する承認を随時行って意欲を喚起する。 ○ICTを活用して、個別最適な学びに取り組めるよう促す。 ○読書活動を啓蒙し情操教育をする。	B	○もりたんの発表や振り返りで自分と向き合って言語化し、発表できた。 ○4月二者面談、科目選択三者面談、7月進学者二者面談、学期末県外生四者面談、2学期始め二者面談、気になる生徒との面談を随時行った。 ○学年や各教科で適宜使用した。 ○年間を通して朝読書を実施した。	○白い森未来探究学の発表等で、学んだこと・考えたことを自分の言葉で発表した。また、インドの学生との交流においても、異文化を受容し自分の気持ちを伝えようとした。 ○目標ややるべきことが明確になり、授業への集中力が増し、放課後講習にも意欲的に取り組む姿が見られた。 ○自分の理解度に応じて自分のペースで学習する姿が見受けられた。 ○毎朝10分、集中して読書をした。
			2年	○海外研修旅行などの機会をとらえ、保小中高連携事業の重点となっている「国際」と「情報」に係わる活動に、生徒が主体的・計画的に取り組むような指導を充実させる。 ○教科学習、進路学習、総合的な探究の時間の三本柱の相互の関連性をとらえ、育成したい資質・能力の住還を授業で実践する。 ○インターンシップや地域ボランティアなどの機会を通じて生徒の職業観や勤労観を深めるとともに、生徒が自分の適性を理解し、就職や進学についてより目標を深化できるような支援を行う。 ○生徒の実態に応じて面談を行い、学校生活での課題や進路について、具体的な数値や資料を示しながら生徒自身が主体的に考え行動できる環境を整える。	A	○コロナ禍が小康状態になって以降、初めての海外研修旅行となったが、旅行者との綿密な打ち合わせを行い、無事に充実した研修旅行を遂行することができた。 ○基礎基本を中心とした朝学習の取り組みが安定して継続されてきた。また、読書会などの機会を利用して、マイプロジェクトのテーマと関連した書籍や文献を読み、個人的経験だけではなく先行的な知見を研究に盛り込むきっかけになった。 ○二年生を主体とした新生徒会役員が選出され、生徒会活動だけでなく、ボランティア活動や様々な校外活動にも主体的に参加することができた。中条高校の学校行事への参加などもあった。 ○四年制大学進学希望者をを中心に、2～3回程度担任面談を繰り返し、志望学部・学科や入試方法の確認まで行った。	○前年度から継続して研修旅行に係る事前研修や情報提供を受け、生徒自身が班別などの単位で考えた。 ○全員の朝学習指導や、進学希望者へのスタディサプリ講習会等に参加した。 ○ダイアリーへの記録が習慣化し、体験活動の振り返りが充実した。 ○就職及び進学の生徒に対して、特に進路確認が必要と思われる生徒を中心に個別面談を受けた。
			3年	○白い森未来探究学や個人毎の進路活動を通して、意思ある選択ややり抜く力を向上させる。また、生徒一人一人の進路実現に向けて協力的に支援をする。 ○基礎学力の定着と自学自習習慣を育成するため、主体的・継続的な学びを促す。 ○朝学習を通して、計画力・課題設定力を養成する。	A	○適切な時期に進路や生活に関する面談を実施した。学年団と進路指導主事で情報を共有し、最適な指導体制を構築できた。12月末に全員の進路実現を達成した。 ○個々の進路実現に向けて、優先的に取り組むべき学習を面談や日常の声掛けで伝えた。進路決定後も学び続けることの必要性を伝えた。 ○朝学習記録シートを作成し、課題設定と実施状況を確認させた。後期からは教員の指示なしに自ら学習に取り組んだ。	○面談での助言を生かし、安定した学校生活を送りながら、納得した進路選択をし実現できた。 ○受験期が近づくにつれ、時間を有効に使い主体的に学ぶ姿が見られた。進路決定後も学びを続けている。 ○定期テストや進学・就職試験に向けて計画的に学習、準備する姿が見られた。また、各種資格検定試験など自己の目標に向けて計画的に学習できた。
2 生徒・一人ひとりの発達指を導く、社会的	B	① あいさつの励行や基本的な生活習慣の確立に向けた援助・助言を行い、自律した社会人としての基礎固めを行う。 ② 共感的な人間関係づくりや集団形成を支えることで、生徒一人ひとりが個性的な存在として尊重されるような学校の雰囲気をつくる。 ③ 学校行事やボランティア活動等への主体的な取り組みを通して社会とのつながり意識させ、生徒一人ひとりの自己有用感を醸成する。 ④ いじめのない学校を目指し、継続的にいじめ防止対策を徹底する。 ⑤ 地域と連携しながら放課後活動の充実を図る。	1年	○一人ひとりが、自分の個性・特性・状態に目を向け、「自分はどうしたいのか」自己決定を促し、自分の望む姿に近づけるよう支援をする。 ○自分や他者を大切にすることを育み、学年集団の共感的な雰囲気醸成する。 ○「自分のできる挑戦」を模索させる。 ○校内MC委員会、保護者、町教育委員会、寮アシスタント、必要に応じて福祉関係者とも連携して生徒一人ひとりに対応していく。	B	○日常の面談や声掛けを通して、生徒がどうしたいのかを問い、生徒の気持ちを尊重して自己決定を促した。 ○ホームルームを始め、授業等においても随時声掛けを行った。 ○適宜面談や声掛けを行い挑戦を模索させた。 ○校内MC委員会・保健室・町養育委員会・寮アシスタントを始め、必要に応じて福祉関係者とも連携した。	○今すべきこと・できることを考えて授業に臨んだり、白い森未来探究学でも主体的に活動する生徒が出てきたりした。 ○概ね規範意識があり、他者を思いやる行動がみられる。 ○サミットコアメンバー・英語弁論・生徒会役員・地域のイベント参加・短期留学希望など、主体的に挑戦する姿が見られた。 ○関係者と情報を共有して指導できた。
			2年	○自己管理能力を育む指導を行うとともに、さくら連絡網などによって生徒の心身の状態を確認し、生徒自身や保護者の困り感を把握しながら個別の支援を行う。 ○校内外の活動を通じて、学校を代表する立場としての生徒自身の言動について自覚を促し、規範意識を育む。 ○校内外の様々な活動に参加することによって、生徒一人一人の役割や他者に対して必要とされている存在であることの自己理解を促す。 ○生徒が抱える自己や対人的な問題に係る不安を早期に把握し、保護者、MC特支委員会、町教育委員会などとも連携して状況の改善に努める	B	○ダイアリーを提出する生徒は全員ではないが固定化し、生徒が記載した内容から生徒の生活状況や行動の変化を早期に把握できた。年間を通じて、昨年度より安易に保健室を利用する生徒が減少し、心身の自己管理の改善が見られた。 ○自分がやりたいことを最優先し、置かれた状況で取るべき行動を正しく判断できない生徒が少なくない。また、自分が責任をもって果たすべきことを行わず、うまくいかないことを他者のせいにするような姿勢が依然として見られる生徒もいる。規範意識を互いに守り合うような関係性の構築が今後も継続した課題である。 ○小規模校サミットや全校行事などにおいて、言葉による自己表現力が向上した生徒が増えた。以前は発表が苦手だった生徒が聴衆を前にして発表することができるようになる成長が見られた。 ○健康面で困り感のある生徒などに対して、生徒や保護者だけでなく、町教委や寮アシスタントとも連携しながら、健康状態を改善することにつなげることができた。	○ダイアリーの記載によって、具体的な生活の様子や情報を教員に提供した。保健室の頻繁な利用が減少した。 ○規範意識を高める必要がある生徒への個別の指導を行っているが、自分がやりたいことが優先され、地域や外部からのイメージについてさらに考える必要がある。 ○小規模校サミットでの各自の役割を自覚した行動が取られていた。地域ボランティアに主体的に参加する機会が多く見られた。 ○問題を抱えていると思われる生徒からの申し出などもあり、早期把握と個別の指導ができた。心身の不安について、保護者とも情報交換を行い状況が改善された。
			3年	○日頃から体調管理の呼びかけを行い、心と体の不調を未然に防止できるようにするとともに、受験期や将来に必要な自己管理能力を養成する。 ○学校を代表する最高学年かつ成人に必要な規範意識を醸成する。 ○各種行事などでリーダーシップを発揮するとともに、仲間同士が認め合えるような関係性を築く。	A	○感染症流行期には特に体調管理に留意し、長欠者を除き概ね99%以上を維持できた。 ○校外の授業での地域の方々との関わりや提出物の期限を厳守させるなどし、規範意識を自覚させた。就職・進学試験の提出書類については期限前の提出を徹底させた。 ○クラスマッチなどの学校行事、HRなどのグループワークにて力を養える場面を設定した。各授業でも適宜対話の場を設けた。	○体調管理に気を配り、良好な状態で受験に臨んだ。進路決定後も生活リズムを維持しながら学校生活を送った。 ○社会のルールを知り、守る意識が向上した。進路に関する提出書類を締切期日を守りながら作成した。 ○仲間同士を認め合い、クラス内で誰とでも意見を臆することなく交わすことができた。
3 安心・安全かつ信頼される学校づくり	A	① コミュニティ・スクール運営やアフターコロナに合わせたPTA活動を実施し、学校・家庭・地域が一体となった活動を工夫して行う。 ② 特色ある教育活動や生徒の活躍を積極的に発信し、学校の魅力を伝える。 ③ 危機管理体制の維持及び施設設備の安全管理により事故防止に努める。	1年	○家庭・地域との協働関係を促進するために、学年通信やさくら連絡網、SNSを活用しながら、生徒の活動の様子を積極的に広報する。 ○自他の命を大切にし、お互いに安心・安全な学校生活を保持するため、適切な判断ができるよう促し、事故の未然防止に努める。	B	○学年通信や公式SNSを通して、生徒の様子を発信した。 ○必要に応じて、養護教諭・特支CNによる面談も実施した。また、生徒に適宜声掛けをしたが、一人ひとり抱える課題も異なっているので、もっと寄り添った生徒理解・指導の方法を検討していくことが必要である。	○写真の掲載は、生徒の様子が伝わりやすく効果的だった。 ○学年全体としては、他者を大切にしていると感じ取れる行動がより多く見受けられるようになった。個別では、健康課題を抱える生徒がそれぞれ自分の課題と向き合っている最中である。引き続き、その生徒の自己肯定感を高めながら寄り添った指導を行う。
			2年	○家庭や地域との協働関係を促進するために、学年通信やSNSなどを活用しながら生徒の学びの様子を積極的に発信する。 ○安心で安全な学校生活を送るため、命の大切さや他者を思いやる心を育み危険を回避する思考・判断を促しながら、事故の未然防止に努める。	A	○学年通信を第5号まで発行したことに加え、二度の研修旅行保護者説明会の機会も通じて、対面やオンラインで生徒の様子や学校・学年の取り組みなどを発信した。 ○入学時と比べて、お互いの人間関係の距離感がある程度保ちながら、必ずしも親しくない生徒とも必要最低限の関わりを持つことができるようになった。	○学年通信や研修旅行保護者説明会などの機会を通じて、学年の現状を伝えることができた。 ○全体や個別指導を通して、気になることをダイアリーに書いたり、直接担任団に相談する生徒は少なくなかった。
			3年	○家庭・地域との協働関係を継続するために、学びの様子を積極的に発信する。 ○様々な活動をする中で事故防止のため安全管理に務め、自他の命の大切さや周囲への配慮を意識した姿勢を育む。	A	○年度初と学期末に紙面で学年通信(教員から生徒・保護者への思い)、月1回さくら連絡網で学級通信(生徒の活動の様子)を発信した。 ○LHRで自分も他者も幸せに生きていくための権利について深く考えた。また自分の考えを持つことができた。	○家庭と学校における強い協働関係を維持できた。 ○社会に様々な人権問題を考え、あるべき言動を意識できるようになった。また他者に流されることなく自分の考えを持つことができた。